

### (3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI /12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院等	実施機関：京都市教育委員会 連携機関：京都教育大学大学院連合教職実践研究科 京都市立下京中学校
コラボ研修プログラム	事業名：【NITS・アクティブラーニング連絡協議会 コラボ研修 in kyoto】
支援事業報告書	研修等名：【NITS・アクティブラーニング連絡協議会 コラボ研修 in kyoto】 主タイトル：A L の具体的実践を学ぶ 副タイトル：質の高い授業の実現に向けて 開催日時：令和5年8月5日 13時30分～16時30分 開催場所：京都市立下京中学校 参加者：教員26名、教育委員会2名、大学関係者等1名 計29名

**内容：**※全体発表の内容をテブ起こしするなど、具体的に記載してください。研修等の様子は、写真を右に貼り付けてください。

本懇談会は、会場参加、オンライン参加併用のハイブリッド形式による2部構成で実施した。第1部は京都市立下京中学校、岡崎市立新香山中学校、能美市立辰口中学校、調布市立調布第五中学校の実践発表を行った。第2部は、姫路市立白鷺小中学校による講義をもとに、全体で意見交流を行った。

#### 第1部

○京都市立下京中学校の発表内容（発表：和田正裕）

従来の授業改善、教職員研修、カリキュラム・マネジメントの実践をベースに、生徒自身の学び方や「学びに向かう力」に着目した研究の報告が行われた。学習指導と生徒指導を関連付けながらの指導のポイントを報告した。

○岡崎市立新香山中学校の発表内容（発表：石原昌仁、小田哲也）

総合的な学習の時間を ESD の6つの視点で働きかけ、7つの力の習得を目指している。情報収集、情報編集、情報整理と学びの位置づけを各学年の活動に位置付けながら、生徒自身が資質能力の伸長を自覚できるような学習展開を研究するという実践の報告が行われた。

○能美市立辰口中学校（発表：中村一成、仁地裕介）

学校行事や生徒会活動、オンライン学習、家庭学習等、生徒の学習活動全般について ICT を軸としたカリキュラム・マネジメントを実践、社会参画力、情報発信力、課題解決力という3つの力の習得を目指す実践について報告が行われた。

○調布市立調布第五中学校（発表：岩田 歩、小坂 力）

総合的な学習の時間を軸にしたカリキュラム・マネジメントをベースに、授業改善に向けて教職員が一丸となった実践が報告された。多くの学校の実践を参考にしながら進める研究内容であることから、その後の質疑応答にも熱が入った。

#### 第2部

○姫路市立白鷺小中学校 講義（講師：星川 護、杉本直美）

○講評・助言指導：田村 学（國學院大學）

義務教育学校として9年間の学びを見直し、総合的な学習の時間を軸にしたカリキュラム・マネジメントに取り組んだ実践報告が行われた。学校教育目標や目指す子供像を教職員できちんと共有するという基本に立ち返り、同時に現在の児童生徒の実態に合わせてめざす姿の見直しにも着手した。その上で「育成をめざす9つの資質・能力」として視覚化。9つの資質・能力は生活科・総合的な学習の時間で育てるという共通理解を図った。また、めざす子ども像を「社会をつくる子」「探究する子」「がんばりぬく子」と、児童生徒にもわかりやすい言葉で明示した。

具体的な授業実践報告なども交えながら、半年間の成果と課題が報告された。その後、自校での実践を交えた活発な意見交流ができた。前月に行われた日本生活科総合的学習教育学会での発表も報告され、参加者に大いに刺激となっていた。田村学教授の助言もさしはさみながら、改めて、中学校の教員が主体的に授業改善に取り組むことの重要性を全体で再確認することができた。

**成果：** ※参加者の声など客観的な情報・データとともに記入して下さい。

・研修講師の田村学教授（國學院大學）から、各校・団体の研究についての講評と、学習評価についての講演を聞くことができた。特に、カリキュラム・マネジメントの実践と主体的に学びに向かう態度については、児童生徒の具体的な姿を実践発表の中からも指摘しながら分かりやすくご教授いただき、自校の研究について助言を求める発表者と研究推進のアイデアが欲しい参加者の両方のニーズと合致した有意義な研修となった。

・オンライン参加も含めて、昨年度よりも参加が少なかったが、その分、参加者の質疑にはきめ細やかに対応することができた。会場からの質問に発表者が答えるだけでなく、その都度、田村教授からも助言があり、密度の濃い協議だった。

・コロナ第5類への移行後初めての会であったが、部活動も全国規模の研修会も再開されたこともあり、昨年度のように参加者数は増えなかった。京都市に関しても年休取得促進日に入る週末に当たっており、各校への呼びかけ方が難しいところもあった。今後、開催の仕方については様々な面からの改善が必要であると思われる。

・全国各地で実践されている学校の先生方と、直接話すことで、自校での困りや課題解決のヒントが得られた。各校の研究発表会にも参加したい。（参加者の声より）

**アイデアや工夫したこと：** ※3～5つ程度の箇条書きしてください。

・各校、団体が重視している研究について詳しい説明が行われ、カリキュラム・マネジメントを実践するに当たってのポイントが整理できる内容であった。特に第一部は、主体的・対話的な学びの姿の実現が、各校ともある一定程度実現した状態からの研究の報告となっており、今後の研究の進め方や方向性を模索するにおいて互いにヒントを得られる機会となっていた。

・田村学教授の講演の時間を改めて設けずに、あえて適宜助言をいただきながら進める形とした。各校の実践について、参加者の疑問等がクリアになることを通して、より具体的なヒントを得られる会となるように心がけた。時間設定についてはさらに工夫が必要である。

・オンラインでは研修中の事務的な連絡を迅速に行うことができた。また、画面共有することにより、分かりやすい説明や画像提示をすることができたが、昨年度より参加者は減少した。

**<写真・図など>** ※会場の熱気や規模がわかる写真、参加者の表情がわかる写真（寄って撮影またはトリミング）を撮影してください。

